

〈博物館特別展〉

特別展「法隆寺一切経と聖徳太子信仰」の開催に寄せて

博物館主事 宮崎 健司
(教授・日本古代史・学芸員)

大谷大学博物館の2007年度特別展「法隆寺一切経と聖徳太子信仰」が10月9日(火)から11月28日(水)まで、斑鳩寺・鶴林寺・観音寺・四天王寺・中山寺・法隆寺・祐誓寺・宮内庁書寮部・京都国立博物館・東京国立博物館・奈良国立博物館・文化庁・同朋学園大学部附属図書館など多機関の協力のもと開催された。

その内容は、聖徳太子と法隆寺を紹介した「Ⅰ 聖徳太子と法隆寺」、法隆寺一切経の書写の様子を紹介した「Ⅱ 法隆寺一切経の形成」、法隆寺一切経の特徴を紹介した「Ⅲ 法隆寺一切経の諸相」、法隆寺一切経書写事業の背景にあった聖徳太子信仰に関わる彫刻・絵画を紹介した「Ⅳ 聖徳太子信仰の造形」の四つのテーマで構成されたもので、書跡・彫刻・絵画など国の重要文化財5点を含む50点の作品が展示された。

法隆寺一切経は、平安時代後期の代表的な一切経で、承徳2～3年(1098～9)に前五師興円らによって書写された『大般若波羅蜜多經』を契機に一切経書写へと発展した(第

Ⅰ期)。本格的には永久2年(1114)頃から勸進僧勝賢が推進し(第Ⅱ期)、のち保安3年(1122)から勸進僧林幸に引き継がれて、大治6年(1131)頃まで書写が進められた(第Ⅲ期)。通算3期、実に30年におよぶ大事業であった。また写経事業の背景には法隆寺の聖霊院新造と本尊聖徳太子坐像造立という聖徳太子信仰の高揚があったとされる。

よく知られた古写経でありながら本格的に取り上げられた展覧会はかつてなく、本展が初めてで、研究者からはたいへん関心が寄せられた展覧会となった。

今回の展示で注目されるのは、法隆寺一切経の書写の様子や特色を取り上げた「Ⅱ 法隆寺一切経の形成」と「Ⅲ 法隆寺一切経の諸相」である。他機関からの出品をまじえながらも、ほとんどが館蔵品で構成されたことの持つ意味は大きい。

法隆寺一切経の遺巻は、現在、国の重要文化財を含めて約1000巻が法隆寺に伝えられるが、巷間にも400巻以上が分蔵され、うち大谷大学博物館に約80巻が所蔵されている。これ





は巷間に分蔵されるものとしてはもっともまとまったコレクションといえる。しかも、分量だけではなく、内実も優れているのである。

まず法隆寺一切経の書写では、康和2年(1100)に静因の書写した『貞元新定釈教目録』巻29(康和本)と永久2～3年(1114～5)に林幸の書写した『貞元新定釈教目録』巻29・30(永久本)が注意される。前者は第Ⅰ期の書写にかかわる台帳の可能性があり、後者は最終的な勧進僧である林幸が第Ⅱ期の勝賢の時代より参画していたことを伝えるとともに、この一切経の最終書写台帳であったと考えられるのである。さらに康和本とあわせて、この一切経の一具とされた大治年間(1126～31)に書写された『貞元新定釈教目録』(大治本)のうち、巻1・7・27が展示されたが、それ以外にも巻16～19、24も所蔵されている。

次に法隆寺一切経の特徴のうち、古写経の転用や幅広い勧進についても注意される館蔵品が多々みられる。奈良朝写経として著名な光覚知識経の『衆事分阿毘曇論』巻9は、古写経転用における修治の痕跡とおぼしき墨書・朱書が遺されている。また勧進の様子についても、永久4年(1116)に書写した『勝天王般若波羅蜜経』巻4や永久3年(1115)に書写した『撰大乘論』巻上、元永元年(1118)に久仁が書写した『阿毘達摩大毘婆沙論』巻52などがあり、前者は寺僧の親族にまで勧進

していたこと、後者は宗縁によって興福寺・薬師寺に協力を仰いだことを伝えている。

このように質量ともに貴重なコレクションであるが故に、館蔵品を中心とした展示構成が可能であったといえる。

さらに留意しなければならないのがコレクションの伝来である。すべてが一様に伝来したわけではないが、多くは先学から寄贈されたものである。その先学とは真宗大学(大学の前身)図書館長を務めた山田文昭(1877～1933)であり、その蒐集に係るものが、コレクションの半分を占める。また、近年の蒐集によるものもあるが、それとても核となるコレクションがあつてこそ、意味あるものといえよう。しかも、それらコレクションは、先学が単にコレクターとして蒐集したものではなく、それぞれの学問的関心に基づいた蒐集であるところが重要である。まさに学問のあり様を後学に示唆するものといえよう。

したがって、今回の展覧会は、館蔵品の資料的価値とともに、先学の学問の伝統を内外に示すよい機会になったのではないかと考える。

展覧会を観覧したある識者が自身のブログの中で「大谷大学の底力を感じさせる内容」と評していた。その文面を目にした時、誇らしげな気持ちと裏腹に、その「底力」とは先学からの学問の伝統がささえるもので、次代へ受け伝えるべき我々の責務の重さを痛感した次第である。